
希望の扉

アラヤシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希望の扉

【Nコード】

N8848V

【作者名】

アラヤシキ

【あらすじ】

一人の女は疑念を持った。

彼は、どちらを選ぶのか。

その選択を、見守りたくなった女は、ある行動に出る。

そういえば、私はあなたにとってどんな存在なのでしょう。

もしかしたら、一番大切な人でしょうか。

それはきっと、欲張りな私の望みなのでしょね。

例えば……

あなたの正義を邪魔する、余計な重荷に過ぎないのならば……

私はどうかして、あなたにとって価値の無い人間に成り下がりますように。

そうすることで、あなたはあなたの望むがままに生きられるはず。

もしあなたが、私のためにその正義を捻じ曲げる勇気をお持ちなら……

私はきっと、あなたを幸せにしてあげられる唯一の人になれるはず。

「希望の扉」

思い起こせば、いろいろな日々をあなたとともに過ごしましたね。
あなたと城の中で出会った日のことは今でも覚えています。

あなたは、何も知らない私の手をとって、私に世界の広さを教えてくれた。

だからでしょうか。

私にとって、あなたは世界と等しいほどの存在に膨れ上がっていました。

世界を救ったあなたは、私にとってそれ以上の存在になっていました。

きつと、皆は笑うでしょう。

それは私の思い違いだと。

けれど、私には確信できるほどの思いの強さがあるのです。

あなたは私にとって世界と等価値。

あなたがいるから、この世界はきつと回っている。

あなたがいるから、私にとってこの世界はこんなにも美しいのだと。

……

……

降りしきる雨の中、男は呟いた。

「……なんて顔してんだよ」

男の髪は雨に濡れ、男の表情を隠していた。

……

……

あなたの姿は美しい。

あの時見たあなたの意志の強さは、確かに美しかった。誇らしかった。

その気高い意志は、何人にも汚すことは出来ないと思った。

あなたは正義の人。その強さを胸に秘めて、ただひたすらに前を歩

ける人。

そんなあなたのそばにいられることが誇らしかった。うれしかった。あのころの私にとっては、それが自慢だった。

私はあなたの仲間なのです。あなたの正義を支える、仲間の一人なのだと。

世界を知り、何も出来ない身であるを知ってなお、私にとってそれが、胸に抱いた誇らしさだったのです。

いつまでもあなたの隣を歩いていた。

これはそう。確かに思った、私の希望。私の純粋な願いの形でした。いつからなんでしょう。その願いの形が変化していったのは。

あなたの隣を歩く、大勢の人の中の一人でよかった私は、いつしか、あなたの一番近くを歩きたった一人になりたくなってしまいました。あなたは私を仲間として見てくれますが、私はあなたにとってのそれ以上になりたくなってしまったのです。

この気持ちは、なんだか嬉しくなるものでした。

あのころの私にとっては、それはとても大きな心の変化でした。

……

……

女は笑った。

「ふふ……どうしても確かめたかった……から」

ずぶ濡れになった女は、笑っていた。

……

……

いつからだろう。

あなたが他の人と話す時間が、うらやましく思えたのは。

あなたは本当にいろんな表情を持っているのだと、思いました。

カロールに見せる表情。リタに見せる表情。ジュディスに見せる表情。レイヴンに見せる表情。あ、それからラピードにも、ラピードにか見せない表情がありましたね。

少なくとも、私にはそう思えました。

だから、あなたのその表情のすべてを、私に向けて欲しいと思いました。

だんだん、その気持ちは強くなりました。

いつ……からだったでしょう。

あなたが仲間と共有するあらゆる出来事が、私とは共有していないものがあることが、嫌になりました。

特に、あなたが特別に思う親友と共有するいろいろなものが許せなかった。

妬ましかったです。

あなたが私以外の仲間に見せるその微笑が、その困り顔が、その全てが。

仲間と呼ばれて、私とのおしゃべりをやめるあなた。

そのとき、私は思ったのです。もっと私とお話してください。あなたの知る、あなただけの気持ちを聞かせてください。

だから、それを中断させた仲間が■く思えてしまったのです。
本当はいけないことだって、わかっています。気味が悪い考えだと、
理解しています。

それでも思ってしまったのは、

きつと、そうきつと。

仕方の無い、ことでしょう？

……

……

「……んで……！……なんでこんなことをした……！」

男は激怒した。

「あはは、ごめんなさい」

女は詫びながら頭を下げた。

顔には、笑顔が張り付いていたままだった。

……

……

世界を救った、英雄。

あなたはそう認めなくても、私にとってあなたは英雄でした。

でも、英雄はみんなにとっての存在。私だけの存在ではありません。みんなあなたが好きなのです。

だから私も、わがままを言うのは止めようと思いました。

でも出来ないのです。

あなたが一人の人間である以上、いろんな人と関わりを持っているのは当然です。

でも、それを頭では理解しているのに心がわかってはくれないのです。

あなたの気持ちを、知りたい。あなたを私だけの存在にしたい。

仲間に相談したこともあります。

リタは最初は驚いていましたが、親身になって話を聞いてくれました。

ジュデイスも、微笑みながら私の話を聞いてくれました。

でも、二人は少し怖い顔を見せたことがあります。

私が、ユーリを私だけの人にしたと言った時でした。

始めは、そのわがままを気味悪がったのかと思いました。

でも違いました。二人は真剣に考え、私にこう教えてくれたのです。

「……ユーリは、あいつは色んな奴のこと心配する奴でしょ？……だから、エステルだけを見るってことは、……あいつっぽくないと思う」

「そうね。もう少しエステルが大人になるべきだわ。……大丈夫。」

思いを伝えれば、きっとユーリの特別な人になれるわよ」

……嬉しいけど、それじゃ足りないと思うんです。

リタの言うとおり、ユーリは正義の人です。正義の味方だから、悪に苦しめられる人はみんなユーリにとって特別、なんですよね。

ああ。

その場はなんとかこらえましたが、あとでこっそり涙を流してしまいました。

ユーリは、私だけを見てくれることは無い。あの人は、そういう人だから……

本当に？

私は、疑問に思いました。

……

……

「ユーリはやっぱり、優しいんですね！」

女は、満面の笑みでそう言った。

男はその瞬間、心を碎かれた。

……

……

大丈夫です。

どっちに転んでも、私は得するんです！
だからユーリ！

安心して、選んでください！！

……

……

「ユーリ!! エステリーゼ様は保護したって!!」

「……あいつなら、今、外をぶらついているよ」

「な……!! 何をやっているんだユーリ! エステリーゼ様は誘拐された身だぞ!! 万が一に備えて常に警護を……」

「は、はは」

親友の慌てた様子に、男は笑った。

「はは! はっはははは!!」

「ユーリ……何がおかしいんだ!」

「……はは。大丈夫だよ、フレン。あいつは初めから誘拐されてなんかいなかった」

「!? な、何を言って……」

「ははは……なんならお前もグルなんじゃねーの?」

「……ユー……リ?」

「どう……なんだよっ! おい!! フレン!!」

親友は、とたんに恐ろしくなった。

普段から余裕を見せていた友人が、不気味な笑いからいっぺん怒鳴りだしたからだ。

「俺を……馬鹿にしてんのか!! お前も!! エステルも!!」

「な、何を……ユーリ、どうしたんだ!？」

男は親友の困った顔を見ると、激情をすぐに微笑みの下に隠し、呟いた。

「……俺は……」

「ユーリ……何があった?」

男は、まるで懺悔するかのようにその場に跪いた。

親友は、男と視線を合わせるためにかがんだ。

しかし、男の顔は髪に隠れて見えなかった。

「エステルは……俺を、はめやがった……」

「……え?」

「俺は、俺のやるべきことを……やったんだ……そしたらあいつ、全部、嘘だって……」

「ユーリ……何を言ってるんだ?」

「……なあ。お前ならどうしたよ! 俺の立場になったとき、お前な

らどうしたよっ!!」

明らかに情緒不安定に陥っている男を前に、親友は呆然となるほか無かった。

この男は、誰だ？

いつもの彼はどうした。自分に自信を持ち、常に悠然としていたあの彼は？

今の姿とは、とても重ならない……

「落ち着けユーリ。事情がよく飲み込めない……エステリーゼ様と、何があった？」

親友の問いに、男は一瞬だけ肩を震わせると、ぶつぶつと小さな声で呟き始めた。

「……俺は……俺が正しいと、思ったことを……」

「ユーリ!!」

「エステルは……はじめから、誘拐なんか、されちゃいなかった……」

男が経緯を語り始めた。

……

……

結局。

そうするんですね、ユーリ。

ああ。

なんだか、おかしくなってきました。

……

……

誘拐されたのは女一人だった。

身代金の要求があった。

フレンから協力を申し出られ、ギルドのメンバー全員で行動を開始した。

途中から、きな臭いとは思った。

騎士団がつかめない情報を、自分のギルドだけはいち早くつかめていたから。

どんどん自分だけが誘拐という出来事の深遠にいざなわれていくようだった。

それでも疑念は振り払って女の下へ一人でたどり着いた。

誘拐犯がアジトにしていたのは、湖に隣接していた小さな遺跡だった。

遺跡といっても跡地でしかなく、雨に吹きさらされていた。

奇襲をかけ、誘拐犯を倒した。

そこまでは良かった。

(……なんだ、この鍵の束は?)

異様に多い鍵の束。その数は50にも及ぶかもしれない。
おかしいとは思いつつ、遺跡の奥へと進んだ。

奥には、湖に沈みかけている小部屋があった。見慣れた彼女はこの小部屋に閉じ込められているのだろう。

いや、状況が違った。

湖に沈みかけている遺跡。満潮になると、遺跡は完全に湖に沈むだろう。

鍵のかかった小部屋が二つあった。

左の部屋からは、仲間の女が自分を呼ぶ声が。

右の部屋からは、複数の女性が助けを呼ぶ声が聞こえた。

誘拐されたのは女一人じゃなかったのか？

左の部屋は、位置関係的に早く湖に沈むだろう。

だが、右の部屋も時間的には大差なく沈むだろう。

沈めば、どうなる？

さまざまなのが頭をよぎったが、そんなものは一瞬で消し飛び、男は走った。

小部屋には頑固な南京錠がかけてある。

大量の鍵の束から、正解を見つける時間は一瞬の余地も残されていないことが嫌でも理解させられた。

助けられるのは、片方の小部屋だけ。

そんなことも頭から消し飛び、男は走った。

自らが助けるべき、その扉を開けるために。

「ユーリ、大丈夫ですよ」

女は心底おかしそうに、楽しそうに笑いながら、自分から部屋を出た。

女の目には、驚きで目を見開いた男が映った。

その姿がなんだか滑稽で、ついつい女は楽しくなっちゃった。

「ユーリが今開けようとしている扉の鍵は、私が持ってるんですから」

）
f i n
（

(後書き)

「さて、ジョン。君に究極の選択を与えよう」

「なんだいトニー。究極の選択って」

「君は今、君の大好きなジェニファーとともにテレビを観ている……おっと、そもそもジェニファーと一緒にいる機会が無いなんて言うなよジョン」

「はは、まったくそのとおり、一語一句たがわない台詞を言おうとしていたところだよトニー」

「いいかい？君の前には、カントリーマアムのバニラ味とココア味がひとつずつ用意されている。君は、どちらかに手を伸ばそうとした。その時、なんとジェニファーもカントリーマアムに手を伸ばしてきた！」

「おお！それは絶好の機会だねトニー！」

「バカ言っちゃいけないよジョン！彼女はカントリーマアムに手を伸ばした！つまり「君が選び取らなかった方のカントリーマアム」を食べるために手を伸ばしたんだよ！！」

「！！」

「ここでクエスチョン！さあ。君はカントリーマアムのバニラ味とココア味、どっちを選ぶ！？」

アンサー

「ジェニファーを殴り倒して両方手に入れる」

「ナイスだジョン！それでこそ僕が見込んだ男だよ！！」

はい。いかがでしたかね。

徹夜でね。モンハンで遊んだ後に書いた作品ですよ。

いわばテンションがおかしい状態。ジャンキーマツハインスタント仮面状態とでも言いましょうか。

粗が目立つかもしれませんが、久しぶりに小説書く&こういう最悪な作家もいるのさ、その名はアラヤシキ！ということを知ってもらいたかった次第でございます。

感想質問叱咤激励誹謗中傷なんでもお待ちしております。

一部本気で取り合わないかもしれませんが、何せモンハンオンラインにはまってしまった身、どうかご容赦を。

いやー！

書いてて楽しかった（悪）

いやー！

モンハン楽しいなあ（苦笑）

いやー！

いやー

…やー

…ー

……（失踪）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8848v/>

希望の扉

2011年11月15日05時47分発行